

## 水の特別賞

助けての声に耳をすまして

川口市立高等学校附属中学校 二年 國府田 絢音

「ニサイデイエ」

これはアフリカで広く使われているスワヒリ語で「助けて」という言葉だ。今、日本から遠く離れたアフリカで命の危機にさらされている人たちがいる。彼らはどんなに汚れている水でも、生きるために飲んでいく。アフリカのような発展途上国では安全な水を使える場所がなく、日々不衛生で汚れた水を使って生活している。生活にとって欠かせない水。彼らは水を池や湖、川、整備されていない井戸から汲んでいる。水を得るため、生きるために多くの子供たちが毎日長い道のりを、一生懸命歩いているのだ。家事や労働ができない子供たちにとって水を汲むということとは、自分だけでなく家族の命をも任されている大切な役割。子供たちが感じる重さは、水だけでなく「家族の命」という重さでもあるのだろうと思う。

汚れた水は当然、人間の健康に害をもたらす。大人だけでなく子供も汚れた水を飲む。特に乳幼児は抵抗力が低く下痢症で脱水症状となり命を落としてしまうことが多い。日本などの先進国では当たり前のように防ぐことができることがアフリカでは通用せず多くの子供たちが命を落としていくのだ。

一日中水を汲み続ける彼らは、十分な教育を受けられない。幼い兄弟たちの面倒、そのほかの家庭の手伝、農村に学校がなく勉強するために長い距離を往復しなければならぬ、等の理由で学びたくても学べないというのが現状だ。どんなに学びたくても、どんなに大きな夢を持っているてもこのままの世界では、彼らがそれをかなえることはできない。未来と夢を捨てて手に入れた水。どんなに汚れていても生きていくにはそれを飲むしかない。生きていくために飲んだはずの水が命を奪うきっかけになるなんてあっていいことなのだろうか。子供たちの未来にとって水問題は大きな被害だ。また、満足に教育を受けられなかった子供た

ちが大人になったとき、貧困から抜け出す術さえも失ってしまう。貧困による大きな経済格差が原因で数々の紛争や戦争が起きている。これ以上命を無駄にしていいたほうがいいのだろうか。

私達が普段飲んでいるきれいな水。美しい水は明日も手に入る。蛇口をひねるだけで簡単に使うことができる。しかしそれは、アフリカの子供たちにはどんなにうらやましいことか。同じ地球で生きているのに、私達にとっての当たり前が彼らにとって当たり前ではない。

「安全な水とトイレを世界中に」これは国連が掲げている持続可能な開発目標の六番目である。この目標は二〇三〇年までに達成しなければならぬ。そのために私ができること、あなたがすることは何だろう。

水質汚染を止めるための第一歩は、衛生環境を整えることだ。しっかりと整備された井戸の設置、トイレなどの衛生施設の設定、それを管理する住民のトレーニングも大切だ。また、住民にとって手を洗うときは石鹸を使うなどの衛生管理に意識も大切となるだろう。しかしもつと身近に私とあなたができることは何なのか。それは支援活動である。水質汚染を止めるための方法が分かっているにもかかわらず進まないのか。深刻化してしまうのか、それは圧倒的な支援不足といえるだろう。日本で暮らす私たちは寄付することが大きな力になる。数千円、数百円、数円でもいい。一人の寄付がやがて重なり多くの子供たちの命と未来を守ることができる。「あなたたち」ではなく「あなた」に向けて今も多くの子供たちが「ニサイデイエ」と言っている。八月一日水の日を通してより多くの人が水という存在について考えるときにも水によって苦しむ子供たちの存在について知ってほしい。「水」というテーマを通して私はこう思った。